



長谷寺かわら版

百日紅

98号

2018 (平成30) 年
1月1日

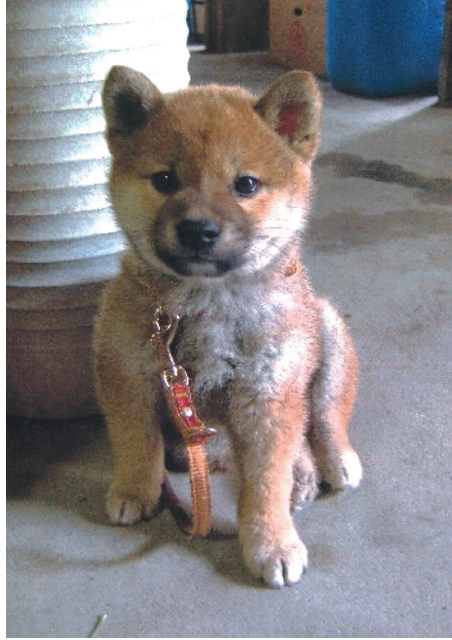
かわち まお

河内の真魚やん

明けておめでとうございませう。旧年中は大変お世話になりました。今年もよろしくお願ひします。

今回は、真言宗の祖師、弘法大師空海の、誕生と成長にまつわる、いささか興味深いお話をします。お屠蘇の肴にお楽しみ下さい

☆お生まれは普通寺？
四国の人なら誰でもご存知でしょうが、空海は、讃岐国多度郡の屏風ヶ浦（いまの香川県善通寺市あたり）で、佐伯田公と阿刀家出身の夫人（名前は分かりませんが、伝説の中では、玉依姫という名前が付いています）との間に生まれました。



愛犬シンゴ。これで生後30日くらいかな。もうじき10歳。戌歳ですもの。

空海誕生の地とされる善通寺（香川県善通寺市）には、少し離れた東院と西院のふたつの伽藍があります。このうち西院は、空海の生家とされる佐伯家の邸宅があつた場所です。かつては誕生院という、善通寺とは別の寺でした。これが明治になって善通寺に吸収合併されます。

ここに、空海が生まれたときに用いられたと伝える産湯井が、いまでも残されています。善通寺のフルネームは、屏風浦五岳山誕生院善通寺。長いですね。空海が両親の供養のために建てたと伝え、寺名は父親の諱（本名のこと。田公は通り名）、佐伯善通にちなみます。

弘法大師誕生の寺として信仰を集め、四国霊場の75番札所として参詣人が絶えず、また真言宗善通寺派の総本山でもあります。実は最近、これまで誰も疑

いを持たなかつたこの善通寺生誕伝説に、疑問が投げかけられています。結論から言えば、空海（幼名は真魚といひます。以下、若いころの空海は、この名前に「君」を付けて呼びます。両親はそれぞれ、パパ、ママとします）は、讃岐ではなく、河内（いまの大阪とお考え下さい）で生まれ、少年期を畿内（京阪奈地域）で過ごしたのではないかという説です。

☆本籍地と生まれた地
真魚君が生まれた場所について、たしかに記録は、まだ見つかつていません。また彼自身、何も書き残していません。残されているのは、本籍地に関する記録だけです。延暦24年（805年）、空海の家得度をめぐって作られた太政官符という公文書に、佐伯真魚の本籍として「讃岐

国多度郡方田郷」の記載があります。しかし本籍地が讃岐国だからといって、そこで生まれたとは限りません。ぼくの本籍は、いまも大分県日田市にあります。幾度か墓参りのおりに訪ねただけで、生まれたのは福岡県八幡市（いまは北九州市八幡区）で、ぼくは八幡の人間です。それもいまとなれば、わずか18年暮らしただけで、もはや鳴門の人間ですが。

いまでも出産のときは、母親は実家に帰って産むことも多いわけで、その場合、誕生の地は母親の実家ということになります。もちろん今と昔では、様々な事情は異なりますが、真魚君の時代は、実家で出産するのが普通でした。出産どころか、結婚自体、女性が男性の家に嫁いで来るのではなく

く、男性が女性のもとに通つて、婚姻が成立しました。これが妻問婚と呼ばれるものです。

ママとママが結ばれたのは、ママの家でのことでしたし、真魚君が生まれたのも、やはりママの家でした。では、ママの家はどこにあったか。

★ママの家

真魚君のママが阿刀家の出身ということ、どうやら間違いありません。空海自身も母方のおじさん（ママの兄）の阿刀大足のもとで学んだことを告白しています。

ところが讃岐には、阿刀を名乗った人々が住んだという痕跡がないらしいのです。

阿刀という氏の呼び名は、河内国淡河郡跡部郷（いまの大阪府八尾市付近）に由来します。跡部郷の「跡」という地名が、氏の名になったわけで、阿刀一族のルーツは河内国だったわけです。

奈良時代に阿刀一族が住んでいたのは、この河内国淡河郡か都（奈良）。あるいは、摂津（大阪府豊能郡）、山城（京都太秦あたり）に限られてきます。少なくとも真魚君の母親は、四国ではなく、畿内の人でした。

伯父の阿刀大足は、天皇

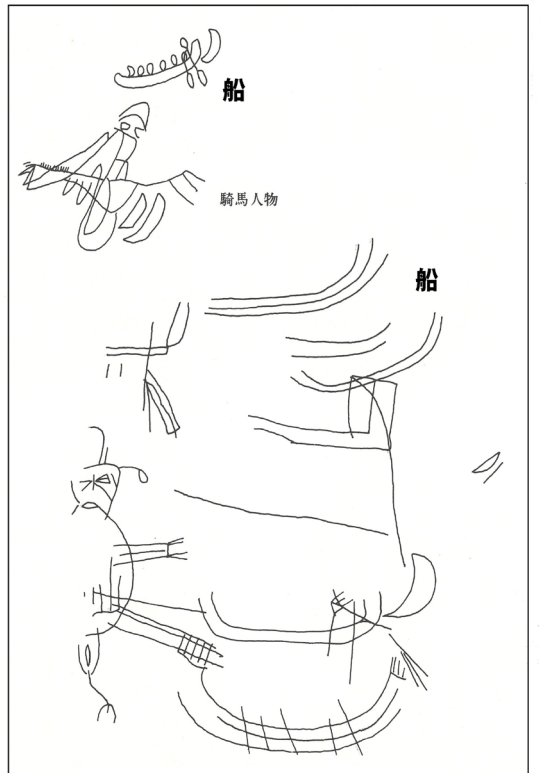
家の家庭教師みたいな存在でしたから、阿刀家というのは、けっこういい家柄だったことになりそうです。

では真魚君のパパは、そんなええとこの娘さんと、どこでどうやって知り合ったのか。

★パパの家

まず、そういう家の娘さんと結ばれたパパの佐伯家も、阿刀家に匹敵するような家柄であったと考えることができます。

なにしろ佐伯家は、とても裕福だったようです。空海は、留学先の唐から、大量の經典や仏具を日本に持ち



善通寺付近にある佐伯氏の古墳の壁画。船が描かれています。

帰りますが、これを手に入るためには莫大な資金が必要でした。また、のちに讃岐の満濃池修復の責任者になったときも、やはり多額の修復の経費を負担したらしいです。どちらも、佐伯家の経済力抜きでは、なしえなかつたことでしょう。

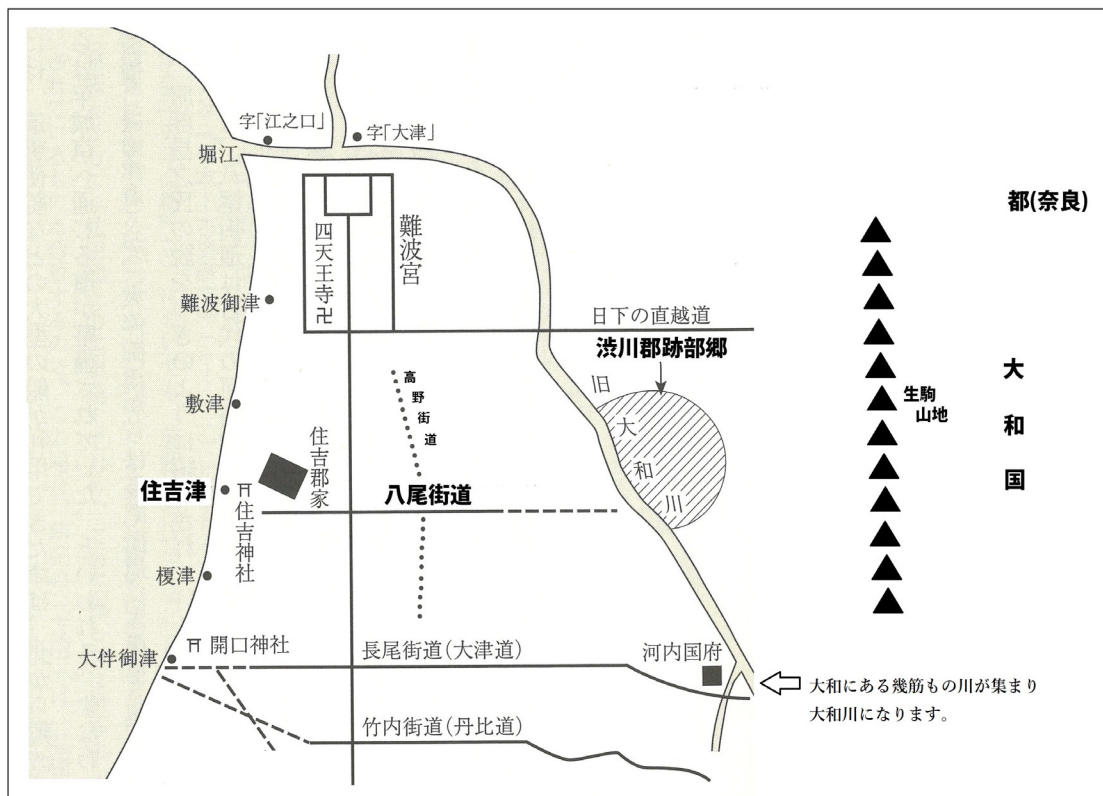
★パパの仕事

善通寺付近にある古墳のいくつかは、この地域の豪族であった佐伯一族の墓ですが、その中に船を描いた壁画もあり古墳があります。船を操り海上交易を展開していたらしいことが分かります。

その海上交易のためには、活動の拠点として、主要な港に倉庫などを構える必要があり、讃岐に拠点を持つ佐伯家のことですから、活躍したのは瀬戸内海。この瀬戸内海航路を東に運ばれた交易物資は、難波の港で陸揚げされ、巨大マーケットである都に運ばれました。佐伯家は、その難波に、倉庫などの荷揚げの施設をもち、交易を展開していたことでしょう。

★パパの仕事場

では佐伯海運の倉庫は、難波のどのあたりにあったのか。空海が青年期に記した文章の中に「住吉の港で出会うた女の子のこと、ちよつと好きになったりしたつけ」というのがあります。パパの倉庫は、住吉大社にほど近い浜（図中の住吉津）にあり、幼い頃にそこで遊んだ思い出を綴ったものかも知れません。その住吉からまっすぐ東にのびるのが八尾街道。生駒山麓まで続いています。生駒



のさらに東は大和国、奈良 阿刀氏はまた、大和川を
 の都がある地です。そしてこ 利用した水運を業としてい
 の街道の途中に、阿刀一族の たらしいという説もありま
 ルーツ、渋河郡跡部郷があ す。大和川は名前の通り大
 ります。 和国(奈良県)から発し、

河内平野を潤し、難波の海
 に流れ出ます。八尾街道は、
 この大和川と住吉を結んでい
 ます。
 住吉で荷揚げされた物資
 は、街道を大和川まで運ば
 れ、阿刀運送の手で川づた
 いに奈良の都まで運ばれまし
 た。佐伯家と阿刀家は、同
 業者でもあったわけです。
 この八尾街道こそが、パパ
 とママが出会い、ふたりを繋
 ぐ道だったのでしよう。

ちなみに私は、大阪で職
 に就いたばかりの頃、この街
 道の通ったあたりで暮らしま
 した。河内を南北に走り庶
 民を高野山に誘う高野街道
 と、ふたりが出会う八尾街
 道が交差するあたりです。
☆真魚君の家
 さて、ママの家で生まれた
 真魚君は、どこでどう育て
 られたか。

河内平野を潤し、難波の海
 れた母親の家で暮らします。
 母親の家は、母の父親の家
 に他なりません。母方のお
 じいちゃんのもとで育てられ
 るわけです。平安時代に貴
 族の藤原氏が権力を握ったの
 は、このためだったと考えら
 れています。
 娘を天皇に嫁がせた藤原
 さんは、娘が生んだ皇子(孫
 ですね)を自宅で育てます。
 自分のいいなりになる子に育
 てることができるわけです。
 その子がやがて次の天皇にな
 ります。そりゃあ、権力を
 握れますわな。
 というわけで、真魚君は生
 まれてしばらくは、河内の阿
 刀邸で、ママとジジ・ババに
 育てられました。
☆真魚君の学び
 とところで空海といえは、偉
 大な宗教家というだけにな
 く、書の世界でも超一流で
 す。「弘法筆をえらばず」、
 「弘法も筆のあやまり」など、
 書に関わることわざは、空
 海の独壇場です。
 空海は、若くして「中国」
 の名のある書家たちの書法
 をマスターしていたといわれ
 ています。そういう書家た
 ちの手本は、都でしか手に
 入らなかったでしょう。また
 優れた師に付いて学んだはず
 ですが、そういう師も、や
 はり都にしかいませんでし
 た。
 いうまでもなく彼は、仏教
 や漢文でも広く深い知識を
 身に付けています。どちら
 もやはり都に住む、当代一
 流の師のもとで学んだはずで
 す。そして奈良の都は、母
 の住む河内からそんなに離
 れてはいません。
 真魚君は、幼い時から都の
 伯父阿刀大足のもとに預け
 られ、多くの学問を、優れ
 た師たちに付いて学びまし
 た。彼が24歳のときに書いた
 といわれる『聾瞽指帰』には、

彼の能力と、身に付けた知識、書の技が見事にうかがわれます。

もしかしたら彼は大学にも行かなかつたかもしれない。彼が書いたとされる『三教指帰』には、「十五歳になつて伯父について学問を学び、十八歳で大学に入った」と記しています。

筆管指帰一巻 弁序

龍毛先生論

唐士隱士論

假名乞此論

觀五帝賦

生死海賦

夫烈飈倏起、淫虎嘯暴

兩霄霽、待兔難是、

丹鳳翔、必有由、

龍威像來格、是故詩人或

倍宴樂、奏煖意、或懷惠

吟而賦、憂、視賢、能、以、馳

褒讚、思、慈、而、飛、誠、箴、

人、有、工、拙、詞、有、妍、蚩、

詩、未、免、艷、麗、沈、休、之、筆、

多、病、果、復、有、唐、國、張、文、

著、散、芳、書、詞、貫、瓊、玉、

寶、鳳、但、恨、濫、能、鴻、事、

国宝「筆管指帰」空海 24 歳のときの作品。真筆です。

しかし学問も書も、15歳から始めるのではあまりに遅すぎます。また、大学に入るのは、13歳から16歳までの間で、しかも五位以上の身分の家の子弟と定められていました。これも18歳では遅いし、残念ながら、パの佐伯家は、大学に進む資格のある五位以上の家ではありませんでした。

彼が大学に行ったと記すのは、この『三教指帰』だけです。しかし、空海の代表作のひとつとされるこの書物の、自叙伝めいた内容が記してある序文は、本当に空海自身が書いたものなのか、疑問が持たれています。

また、ある書家は、10歳になると手が固まってしまうので、書道は5・6歳までに始めるべきだといえます。空海の自由闊達な書法は、手首や肘などの柔軟性が要求されるもので、幼い時に習い

始めたはずだということです。

というわけで、空海の才能は、幼いころから、都で高名な師たちのもとで英才教育を受けたことで、見事に開花しました。言い換えれば、そういう学びの場と、師たちとの出会いがなければ、開花させることなどとてもできなかったでしょう。

もしかしたら真魚君は、パに連れられて讃岐の家に足を運ぶことはあつたにしても、長ずるまではもっぱら都と河内を拠点に学び暮らしのたのかも知れません。

☆河内の真魚やん

以上は、空海生誕の地をめぐる新しい研究のいくつかを参考に、私が勝手に解釈と妄想を加え、思いつきり分かりやすくまとめたものです。河内生誕説は仮説に過ぎませんが、とても魅力的な説ですし、私には極めて説得的な話に思えます。

これまで語られてきた誕生

伝説では、真魚君の両親が出会うシーンなど想像もできなかつたし、また誰もしませんでした。空海の話は、決まって、真魚君が讃岐で生まれる場面から始まります。けれど、もしこの説の通りなら、若いふたりの出会いの場面まで想像できそうです。

もし彼が河内と奈良で幼少年期を過ごしたとすれば、関西弁を喋る、河内の餓鬼大将だったのかもしれない。そう考えると、空海を一層身近に感じられるような気がします。

ひとつだけ残念なのが、郷土の天才少年が、学問を修めに都に出て、海外にまで勉強に行つて、帰国して偉大なお坊さんになったというこれまで信じられていた話が、子どもの頃にたまに都会からやってきていた賢そうな少年は、やはり都で偉くならはつ

群馬県 薄葉恵子さん

たという、いささかつまらないう話になってしまふことです。むろんどちらでも、どこにでもありそうな話ですが、前者なら郷土の自慢話にはなりません。

群馬県の薄葉恵子さん、東京の丸山幸彦さん、徳島市の中内輝彦さん、木津の米本茂雄さんから、カンパが届きました。ありがとうございました。

〒772-0004
 鳴門市撫養町木津 1037-1
 電話 088-686-2450
 ファクス 088-686-2130
 E-Mail
 cho_kuma@mwb.biglobe.ne.jp
 URL
 http://www.chokokuji.jp/

